第3回 IAU アジア太平洋会議を開催して

小　暮　智　一*

1. 会議の概要

国際天文学連合 (IAU) 主催の第3回アジア太平洋地域会議は1984年9月30日から10月5日まで，京都国際会館において開催された．参加者は 22 ケ国より合計 324 名である．その内訳は日本 (210)，韓国 (22)，濠洲 (20)，中国 (15)，インド (13)，米国 (12)，インドネシア (6) のほか，フィリピン，タイ，マレーシア，シンガポール，ニュージーランド，イラク，エジプト，南アフリカ，ソ連，カナダ，チリ，ペルー，英国，ベルギー，西独の諸国の 3～1 名である．

はじめに日程とセッションおよびセッションの座長名をあげておこう．

9月30日　午後　登録，夕方 歓迎レセプション
10月1日　午前　開会式
　　APA+ (J. B. ハーンショウ，N.Z.)
　　午後　APA，天文教育 (北村正利，日本)
10月2日　午前　太陽 (S. M. チィトル，インド)
　　午後　太陽恒星関係 (尹鴻植，韓国)
10月3日　午前　恒星 (Z. コバール，英国)
10月4日　午前　恒星，銀河系 (B. ヒダヤット，インドネシア)
　　午後　銀河系 (J. ガルト，カナダ)
10月5日　午前　銀河系 (R. M. ウエスト，西独)
　　午後　銀河と宇宙 (A. J. タートル，濠洲)
　　夜　さよなら晩さん会

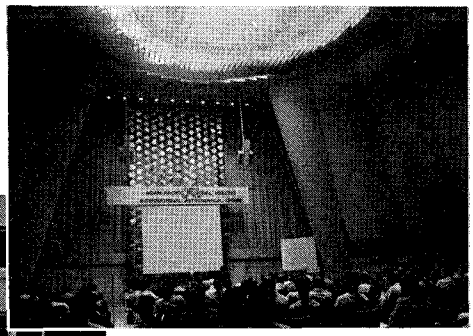
+ APA:　アジア太平洋地域の天文学

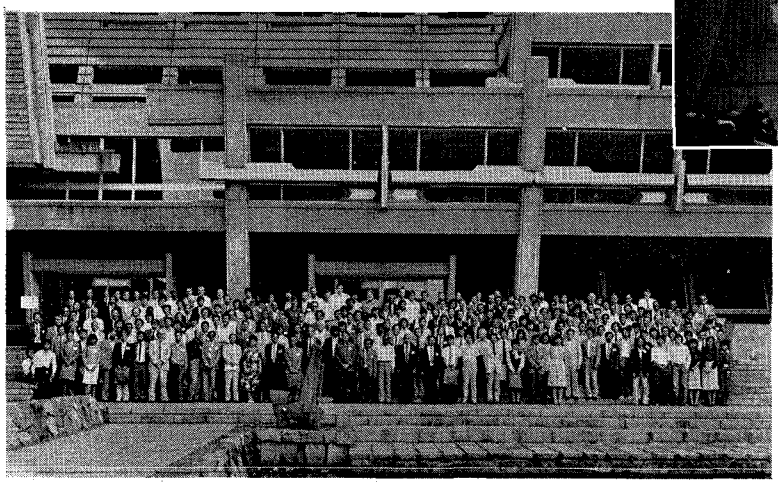
会議は次の2つの組織委員会によって組織された．

学術組織委員会 (SOC): D. C. モートン (濠，委員長)，R. N. マンチェスター (濠)，龔樹模，馮克嘉 (中国)，沈君山 (中国，台北)，J. C. バタチャリヤ (印度)，G. スワラプ (印度)，B. ヒダヤット (インドネシア)，H. M. K. アルネミイ (イラク)，尹鴻植 (韓国)，J. B. ハーンショウ (N.Z.)，S. オルフ (ハワイ)，日本からは川口市郎，北村正利，森本雅樹，小田稔の各氏，IAU からは J. P. スイングス (ベルギー) である．

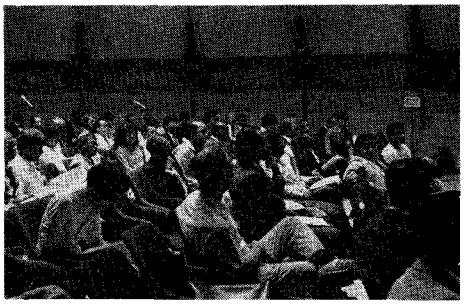
国内組織委員会 (LOC): 小暮智一 (委員長)，石沢俊亮，斉藤衛，平田龍幸，稲垣省五 (以上京大)，日江井栄二郎，北村正利，高瀬文志郎，海部宣男，前原英夫 (以上東京天文台)，尾崎洋二 (東大理)，山崎篤磨 (東大教養)

会議の主会場は 300 入収容のホールで，ほかにポスターセッション2部屋が用意された．この2部屋には 142 編の論文が会期の前後半に半分ずつ展示された．会議と平行して技術展示会が開催され，内外の 22 社から望遠





* 京大理　Tomokazu Kogure: On the Third Asian-Pacific Regional Meeting of the IAU



鏡，測定機器，光学材料，エレクトロニクスなど多面的な展示があり，また，国内天文施設紹介のパネル展には東京天文台はじめ各機関の協力によって写真・記事が貼られ，両展示会によって会議に彩りをそえた．

開会式では沢田敏男京大総長による歓迎の辞につづいて IAU 代表 R. M. ウエスト事務総長，日本天文学会古在由秀理事長のあいさつがあり，組織委員会からはモートン氏と筆者があいさつと歓迎および謝辞をのべた．浅野社中の美しい着物姿による琴合奏は会場に日本情緒をただよわせて好評であった．

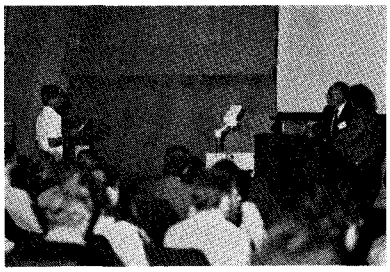
このあと，会場は5日間のセッションに入るがそれについては後で述べる．10月5日のさよなら晩さん会は森本雅樹氏の司会がリラックスした気分をたくみにもりあげ，D. F. マリン（濠）の美しい天体写真に堪能したあとお国ぶりの歌が出たりして楽しい夕べとなった．

会期中の行事としては能楽鑑賞会（金剛流による土蜘蛛）と音楽コンサート（琴とバイオリン合奏など）が京都コンピューター学院の好意で企画開催され，多くの人に楽しんでいただいた．

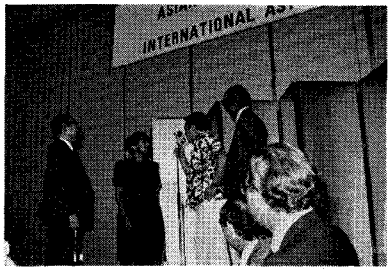
以上のように，この地域会議は大きなトラブルもなくまずは順調に開催されて，LOC は無事にその任務を終えることができた．次節以下では会議開催までの経過と，会議中の各セッションの簡単な紹介を行い，最後に開催に当たっての問題点などを思いつくままに書いてみたい．

2. 会議の開催まで

アジア太平洋地域会議は第1回が1978年12月にニュージーランドのウエリントン市で開かれ，11ケ国より120名（日本から3名）が参加した．第2回は1981年8月のバンドン会議（インドネシア）で20ケ国100名のうち，日本からの参加は18名であった（天文月報75巻3号）．第3回についてはバンドン会議の少し前から日本でやれないかという打診と勧誘があり，国内での協力や京都開催の可能性などを考慮した上，バンドン会議の最終日に日本への招待を表明したのであった．



当初，会議の SOC 委員長としてインド天体物理研究所長バップ教授を予定した．1982年2月にインドを訪問した際，バンガロールでバップ教授にあらためてお願いしたところ，快く承諾され，SOC メンバーの構成や会議の大わくなどについて具体的な打合せにすすむこともできた．このときの議論にもとづいてその年の4月に会議の概要をまとめて IAU への提案を行った．そして，8月，ギリシャのパトラスで開かれた IAU 総会の期間中，ウエスト博士やスイングス博士らと打合せを行っているときにバップ教授急逝の悲報が伝わったのであった．私共は愕然とし，衷心より弔意を表しつつも，急き

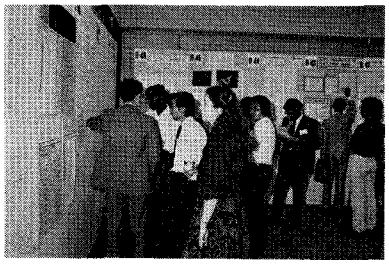


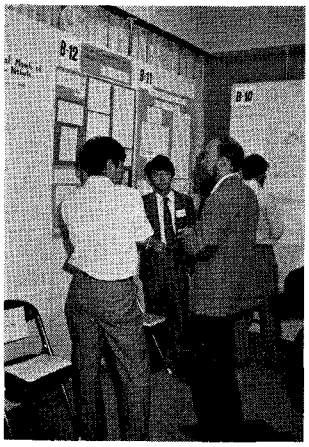
ょ総会出席中の数人で相談し，後任としてアングロオーストラリア天文台長モートン博士におねがいすることにした．博士も事情をすぐに了解されて快く承諾され，バップ教授の方針をひきついで会議の組織に当たることとなった．

ギリシャより帰国後，モートン博士とは緊密な連絡の下に会議の準備をすすめることになったが，博士は几帳面な，しかし，心の広い方で，アルピニズムの愛好家としても知られている．1984年7月にプログラム編成のために来日されたときも，プログラムだけでなく，会場や運営についても国際会議に不馴れた私共 LOC に適切な助言を与えられて運営の改善に大きく貢献された．

さて，具体的な準備は1984年4月の第1回サーキュラーの配布に始まる．8月までに予備登録を行って国内から129名，国外から119名，計248名の回答がえられたので，この数を一応の目安として準備をすすめることとし，早速9月には募金趣意書や展示会の案内等を印刷して資金活動も始めた．

1984年2月には第2回サーキュラーが発行され，参加の申込受付が始まって LOC は急に忙しくなる．LOC として実務の中心になったのは京都の石沢（広報・印刷），





斎藤（会場，庶務），平田（経理），稲垣（行事）の諸氏である．東京からは資金調達，天文教育セッション，会議録編集などを担当された北村正利氏の尽力が大きい．8月に第3回サーキュラー（プログラム案内）の印刷，発送がおわり，アブストラクト集の印刷が始まると，次は来日参加者との対応，国際会館との打合せ．などが頻繁になる．9月に LOC 会議で最後の打合せをやったあとは LOC 全員がそれぞれの分担に追われることになった．

9月30日に京都ロイヤルホテルで参加者の登録が始まり，歓迎レセプションが日江井栄二郎氏の司会で開かれたときは，会議の始まりというよりは裏方の仕事がようやく峠をこした，という気持の方が LOC の実感ではなかったかと思う．

3. アジア太平洋地域の天文学と天文教育

今回の地域会議では特色の一つとして，アジア太平洋地域諸国における天文学の現状や将来を概観するために独立のセッションが設けられた．

開会式につづくこのセッションでは冒頭に小平桂一（東京天文台）による日本の大型赤外線望遠鏡計画の紹介と，D. N. B. ホール（ハワイ大学）のハワイへの設置歓迎の表明があった．つづいて，望遠鏡建設（建設中および計画中）については中国の龔樹模（2.16 m 反射鏡，1.56 m アストロメトリー反射鏡），インドのバタチャリヤ（2.34 m 反射鏡ほか），イラクのアルネミイ（3.5 m 反射鏡，30 m ミリ波望遠鏡），濠洲のスチュワートら（電波干渉計，スターラブ計画）などの報告があり，研究の現状については叶式煇（中国の太陽物理学），スモルコフ（シベリアにおける太陽電波干渉計画），モートン（アングロオーストラリア天文台の最近の進展），高瀬文志郎（木曽シュミット望遠鏡による銀河観測），森本雅樹（野辺山宇宙電波観測所における観測），小田稔（日本の宇宙科学）などの報告があった．また，国際協力の例としてインドネシアと日本との交流の現状を筆者が報告した．

つぎに，天文教育のセッションではアジア6ケ国の代表からそれぞれの国の，主として中高校，大学における天文学教育の扱いとカリキュラムなどについて実情と問題点の報告があった．報告者は次の6名である：M. オスマン（マレーシア），Y. パニチャイ（タイ），馮克嘉（中国，北京），V. R. ベヌゴパール（インド），J. O. ウー（韓国），および大脇直明（東京学芸大）．

アジア諸国の天文教育についてこれだけまとまった報告をきけたのは恐らく今回が初めてではなかろうか．それぞれの国にはそれぞれの国の事情やお国ぶりもあり，基本的な考え方にもかなりバラエティのあることが感じられたが，その反面，天文教育が直面している実際的な問題，例えばカリキュラムや教員養成などには，やはり，共通した面もある，というのが感想であった．

4. 天文学セッション

天文学関係でとりあげられた分野は，上述の日程表にも示されたように，太陽，太陽恒星関係，恒星，銀河系，銀河と宇宙である．それぞれの分野で招待講演，研究報告があり，それに対応するポスターセッションも開かれた．この小文では各分野に立ち入るスペースもないので詳細については近く刊行される会議録（ライデル社 Astrophysics and Space Science 誌特別号，編集：北村正利，E. バディング）を参照されたい．ここでは全体の輪郭をつかむために招待講演の題名と講演者名を次に掲げよう．

太陽フレアの高エネルギー観測（田中捷雄，東京天文台）

太陽コロナ及び惑星間空間における力学的過程（R. T. スチュワート，濠洲）

太陽及び恒星大気の磁気流体力学現象（内田豊，東京天文台）
プラズマ及び放射過程（R. G. ヒューイット，濠州）
太陽及び恒星の振動（尾崎洋二，東大理）
星の彩層，コロナ及び恒星風（T. サイモン，米国）
古典的アルゴール連星（E. バディング，N.Z.）
X線連星（W. スタンチョ，インドネシア）
激変星（B. ウオーナー，南アフリカ）
連星系起源でないパルサーは存在するか（V. ラダクリシュナン，インド）
円盤銀河の力学（K. C. フリーマン，濠洲）
銀河系中心部（A. R. ハイランド，濠洲）
星から星間空間へのエネルギー供給（C. F. マッキー，米国）
高速流を伴う星生成領域（長谷川哲夫，東京天文台）
球状星団と銀河ハロー（S. バンデンバーグ，カナダ）
準星吸収線（陳建生，中国，北京）
準星の環境（A. ストックトン，米国）

天文学セッション全体を通してみると，日本の観測的研究，なかでも，天文衛星による太陽やX線星の観測，野辺山 45 m 宇宙電波望遠鏡による分子線観測の成果が大きな比重をもち，また，多くの関心も集まった．国外からの招待講演は各分野とも基本的な問題と研究の現状を手ぎわよく整理して紹介された．

5. 開催に当っての問題点

今回の会議は参加者と各方面からの協力によって無事に終ることができた．しかし，LOC として直面した問題もいくつかあった．それについて少しふれてみたい．

1) 参加者　参加者数の予測は予算規模や準備とからんで重要であるが，さいごまでなかなか把握できなかった．予備登録では 250 名という数字がでたのでこれを目安としたが，実さいは 300 名を越し，配布物の準備などに慌てる場面もあった．なお，参考までに今回の講演及び研究報告のうち，日本からの報告の比重をまとめてみよう．

セッション		研究報告数		
		日本	全体	日本の比率
アジア太平洋地域天文学		5	15	0.33
天文教育		1	6	0.17
天文学	招待講演	4	17	0.23
	口頭研究報告	25	52	0.48
	ポスター報告	85	142	0.60

参加者の比率（日本は 65%）と開催国という事情から，この数字はまず妥当であろうが，このような大きな比率は研究者数の多い日本での開催の特色であろう．次回はイラクのバグダードでの開催が招待されている．筆者としては日本から多数参加されることを望みたい．

2) セッションの持ち方　5日間の会期を単一会場にするか，2会場に分けるかは当初からの問題であった．LOC としては日本からの報告が多数になることを予想して2会場も止むを得ないと考えていたが，モートン委員長はじめ，国外の SOC メンバーからは単一会場を志望する声が多かった．その結果，多数の報告がポスターセッションに移され，そのために来日を止めたという人も二三あった．会場の問題は天文学の分野をどこまでとるかということも関連し，事前の十分な検討が必要であろう．

3) 旅費補助　アジア地域の若手研究者の多数参加をはかりたい，ということでユネスコ，財団からの援助の大部分を旅費補助として提供した．第1回サーキュラーで希望者の申出をアナウンスしたが，その時点では補助額の規模や基準もはっきりせず，あとまでしこりとなって残った．ひとつは招待講演者と若手研究者への配分比率の問題，もうひとつは補助額が各人にとって中途半端でなかったかという問題である．来日されたあとで止むを得ず追加したという例も二三あった．限られた予算枠のなかでいかに有効に，また適正に運用するかは最後まで難しい問題であった．

4) ビザと入国　国際会議の場合，ビザの身元保証などは LOC の責任で外務省査証室に直接申請することになっている．はじめの頃はこんなこともはっきりしなかったので，会議の3日前になって未だビザが発給されてないという電報が入り，あわてて外務省に協力をお願いしたこともあった．また，入国時に空港でトラブルのおこるおそれがあるともきいていたので，成田と大阪空港の入国管理事務所にはあらかじめ協力の依頼状と参加者リストを送り，9月29, 30両日には定金晃三，北井礼三郎両氏と院生数人に大阪空港到着ロビーに IAU の旗を持ち歓迎をかねて待機していただいたが，さいわい，何のトラブルもおこらなかった．

6. あとがき

今回のアジア太平洋地域会議を終えたあとのいちばん大きな反応は 1994 年の IAU 総会を日本に招待してはどうかという機運が大きく盛り上ってきたことであろう．総会となれば会議の規模が1桁大きくなるが，今回の会議開催が一つの経験となって次のステップへの見通しが開けて来たということであろうか．

また，今回の会議が成功したのは実に多くの方々の協力によるものである．ここに，個人，法人を含めたそれらの方々に深甚の謝意を表してこの小稿を終りたい．